

アマダイ通信NO. 120

(Tile fish network letter)

2017年百日紅に雨

知人・友人各位

今号で120号。隔月に一回の東大三鷹クラブの講演会の告知、近況報告、お世話になった方々へのお礼を兼ねて年6回発行、20年以上続く。兄が明治以来4代続く郵便局長を辞めてから、徐々にメールに切替えさせて頂くが、併せて5千人の読者の三分の一近くが郵送。「郵便局の革ちゃん」としては痛し痒し。露悪趣味的で赤面の思いもするが、客先で、あれ面白いですね！と言われると、元気がでる。ここまで続くと今更止める訳にはいかない。読者の皆様の応援を宜しくお願い致します。

◎人生百年時代のライフ・シフト・・周回遅れのトップランナー！？

東洋経済に自社刊行本の宣伝でもあるが「教育⇒仕事⇒引退」の3ステージから「マルチステージ」の人生へ！との特集記事。①「エクスプローラ」・・日常生活から離れ、旅したり、新しい人と出会ったり、既存の価値観を壊し、自分を再発見。②組織から独立、生産的な行動に携わる「インディペンデント・プロデューサー」・・やりがいや人とのつながりを重視しながら、一時的なビジネスを立ち上げる時期。③異なる種類の活動を同時に行う「ポートフォリオ・ワーカー」・・お金ややりがい、人とのつながりなど、複数の目的で活動しながら刺激的な生活を送る時期がある、と。


超長寿化（2007年日本生まれの子供の半分は107才まで生きる）の結果、同世代が一斉行進する時代は終り、多くの人が転身を重ね、複数のキャリアを経験する「マルチキャリア人生」へシフトする！そのためには、①長い人生を主体的に生きるため、「自分が何者か」というアイデンティティーを常に意識。②お金以外に、家族や友人、スキルや知識、健康といった「無形資産」を築くことが不可欠。③余暇時間をレクリエーション（娯楽）ではなく、リ・クリエーション（再創造）に使う自己投資が重要。④若者の特長だった若さ、柔軟性、遊び心などを、生涯保ち続けなければならぬ！という。

東大法学部卒のエリートコースを否定、社会主義革命に人生を賭け、30歳まで学生。青春の夢破れ、受験業界でフリーター。40歳でサラリーマンを経験、長い学生時代に自ずと培ったネットワークとオルガナイザー（革命の営業マン）としてのマインドとスキルで、90年のバブル経済崩壊で民間需要が消失する中、官公庁やNTT、JR、UR、JTなどにPCカーテンウォール（コンクリート製外壁パネル）を使って頂き、会社に貢献。50歳で独立、エコビジネスの起業に失敗、窮余の策で前職の高橋カーテンウォールの営業顧問にして頂き、売る物も手にし、営業コンサルタント業を起業。傍ら、同窓会活動やNGO、NPO活動に精を出すと、更にネットワークが拡がり、お陰様で売り先も売る物も増えと好循環。

古稀になるまで🐡が切羽詰まり、やむにやまれず、無意識にやって来たことを、意識的にやるのが、娘や孫の時代のクールな生き方だ！と編者。「こうとしか生きられない人生」がある！と思いここまで来たが、どこまで意識的に生きられるか？編者は「年金受給額の減少や終身雇用の見直しが避けられず、ライフ・シフトの重要性は高まる」とも。無意識

にやって来たことを意識化、もう一つマルチに、「完全自由人」化しつつある同世代のために「ライフ・シフト」コンサルタントを起業、社会に貢献出来ないものだろうか？

◎土方殺すにゃ刃物は要らぬ・・建設産業の生産性向上と労働環境改善へ！

大江戸線光が丘駅前、光が丘団地のど真ん中に清掃工場。建替えて解体工事が始まり、工場全体が棟高 48m×間口 76m×奥行 120m の柱のない巨大なテントで覆われる。建築工事は鴻池組が請負い、解体工事はが営業顧問をする株式会社トータル環境が下請けする。清掃工場解体は住民の生活に大きな影響を及ぼす騒音、粉塵、健康被害を及ぼす危険のあるアスベストやダイオキシンの飛散が危惧される。東京 23 区清掃組合の練馬、杉並清掃工場解体でも工場全体を大型テントで覆い、騒音、粉塵、アスベストやダイオキシンを完全シャットアウト、台風や地震にも強い、「全覆い工法」が取られる。光が丘工場の解体もトータル環境社の「全覆い工法」が採用される。

今回は煙突の解体では SC ジャパン社がフィンランドのスカンクライマー社から導入した最新式の安全・便利・高効率の移動式ワークプラットフォーム（作業台）が使われる。スピーディに組立・解体が出来、ユニットが 45 度まで屈折、煙突を四角に囲む上部の作業台もマスト（支柱）が二本だけ。上部が細く、下部が太い煙突の構造にも対応、高速で上下する作業効率のいい優れ物。高層マンションやビルの外壁の改装、新幹線や高速道路の点検・保守、改修に最適。海外では高層ビルのカーテンウォールの取付にも利用される。

清掃工場や化学工場の解体を中心に使われる「全覆い工法」だが、超高層ビルの安全で効率的な解体も可能にする。原発の廃炉工事でも放射性物質の飛散という住民の不安を解消出来る。工事が済めば解体、移設して繰り返し使用でき、レンタルも可能。姫路城など、城閣や寺社の改修工事では鉄骨で大きな骨組を組み、一回限りのテントをかけ工事が行われるが、繰り返し使用できる「全覆い工法」なら、エコノミーかつエコロジー。又、解体や改修工事のみならず、超高層ビルや道路、鉄道などの大規模建設工事現場では、基礎工事や地下工事に時間がかかるが、内部での大型機械の使用も可能なこの工法で現場を覆ってしまえば、風雨冷暑の気候に関係なく、24 時間作業が可能で、工期を半分に短縮、生産性、採算性の大幅向上も可能だ。「土方殺すにゃ刃物は要らぬ、雨の 3 日も降ればいい」という劣悪な労働条件による職人不足、週休 2 日制などの働き方改革に対応するにも現場の生産性向上・労働環境改善が不可欠。前回のオリンピックから半世紀、日本の建設技術は環境にも、人間にも優しく、クールだと世界に誇りたい。以下のホームページで光が丘の皆さんと情報を共有できます。<http://hikarigaoka-tatekae.jp/html/livecamera.html>

◎葉をも攫む気持ち②

5 月の連休のロシア極東ツアーから帰国した、三鷹寮同期の S さんとのその後のやりとりです。日本人の二人に一人ががんになり、三人に一人ががんで死ぬ。差引き六人に一人は逆にがんになっても死なず、完治。鍵は早期発見と早期治療、がんの虜にならないこと。がんのことだけ考え、他のことが考えられないようになると、精神的に落ち込み、追い詰められ、免疫力が衰え、がんの思うつぼ。今日がんを宣告されても、昨日と今日の自分に変わりがある訳ではない。昨日と同じ生活を明日も、明後日も、そしてずっと続けることが大事。がんとの闘いは最小限、片手間で。人間いずれ死ぬのだから、要は生きている間、

どう生きるか？がんと闘うのではなく、生きることを考えたい。

※●様、下部内視鏡による詳細検査の結果、直腸がんでした。腹腔鏡手術で肛門は残すそうです。虎ノ門病院で行い 23 日入院、29 日手術の予定です。現在診察してくれているのは T 医師という若い先生ですが、できたらベテランの K 部長に執刀していただく方法はないかと考えています。いずれにしろセカンドオピニオンは求めず虎ノ門病院を信じて、まな板の鯉になろうと考えています。途中経過報告まで。ありがとうございました。 S

※S さん、●です。内視鏡で手術出来るということなら、手術の負荷も少なく、場所が直腸でも問題なく肛門を残せるということ、良かったですね！小生は鳩尾から臍下まで 30 センチ開腹、盲腸諸共大腸を 30 センチ切る、5 時間の大手術。皮下脂肪が厚く、開腹部がうまくつかず、退院が長引き、3 週間入院しました。S さんは、ラッキーです！

※おかげさまで今日退院しました。昨日病理検査の結果も出、ステージ 1 抗がん剤の必要なしということでした。もっと悪いことを想像していたので嬉しい誤算。安心して今日退院しました。●さんの的確なアドバイスとても嬉しかったです。ありがとう。与えられた命、精一杯生きたいという気持ちになりました。 S

※●です。良かったですね！ステージ 1 の大腸がん、転移もなし、抗がん剤も不要で無事退院、おめでとうございます。大腸がんステージ 3b、近傍のリンパ腺を 9 か所郭清、3 か所のがんが転移、余命半年（告知なしでしたが、主治医はそう思っていたよう）の小生に比べれば、天地。大腸は長いから、切ってもつなげば元通り、心おきなくお酒も飲めます！多少は他人の役にも立って余生を楽しんで下さい！（了）

◎とほほの連休 3 日目、今年も夏スキー！

7 月半ばの 3 連休、土曜日は久し振り月島のプールで千 m、40 分ほどかけて泳ぎ切る。25m 毎に平泳ぎとクロールというよりは文字通り自由形、ノンストップで。日曜日は時間が取れず、20 分ノンストップで 575m。3 日目、ガーラ湯沢のホームページを覗くと、夏スキーの画面、今年もこれだ！と、130 センチのショートスキーを担ぎ越後湯沢に。駅前の新橋亭で地料理とそば、地酒を楽しみ 1 時のシャトルバスで GALA へ。4 時のクローズまで真夏のスキーを楽しむ積もりが、東京駅で突然、駅弁とビールもいいなと、車中で駅弁とビールを楽しむ。湯沢の駅ナカのショップの奥、レトロな感じの素敵なカフェで珈琲。日経新聞読み時間潰し。GALA へのシャトルバスを待つが来ない。タクシーを飛ばすと、GALA は閑散。開業は 29 日だと張紙。駅弁とビール、日経のため、新幹線とタクシーで GALA 湯沢まで往復するとは！家に帰って、月島までマウンテンバイク走らせ、千 m 泳ぐ。

8 月最後の週末、土曜日午後、月島の図書館でエコノミスト。区民プールで 20 分で 500m 泳ぎ、有楽町駅まで自転車まで往復。越後湯沢往復の新幹線チケットをゲット。今度こそ湯沢で地料理とそば、地酒を楽しみ、GALA 湯沢で季節外れの夏スキーを一人楽しむ予定が、今回も湯沢到着まで待てず、東京駅で好きな深川めしの駅弁とビールを買い早飯。1 時のシャトルバスまで駅中のカフェで日経新聞を読み、又も時間潰し。

ゴンドラで GALA 湯沢のファミリーゲレンデへ。2 時間で 20 本ほど滑る。短く傾斜も緩い初心者コース。ターンしようとして転び腕を擦りむく。冬のスキーウェアのインナーの朱赤のヒートテックの長袖、股引きの上に赤い千鳥格子のゴルフ用短パンとピンクの半袖ポロシャツ、ピンクのゴルフ帽のスタイルで引っくり返る。携帯用 130 センチのショート

スキーを履き直し滑るが、又転ぶ。斜面に敷いた雪代わりのプラスチックの板はエッジが利きにくく横滑りする。ショートスキーは尚更だ。エッジを利かせようと膝に力を入れると、緩い金具が弾みで外れ転ぶ。金具を締め直すと大丈夫。湯沢の駅で駅弁とつまみ、缶ビールと純米酒買いいい気分。スキーやカートに乗らず歩くゴルフ、水泳や自転車、日々の営業で足腰を鍛え、元気な間は仕事。多少は人の役に立って対価を頂き、生涯現役！？サラリーマン生活が短く、年金もストックも少ない🐟の「長生きリスク」対策！？

◎革爺と孫娘メイの、世界遺産白神、素潜り紀行（17.8.11～16）（I）

昨夏、越後湯沢の信濃川の支流、魚野川で孫娘と川遊び。少年の頃遊んだ故郷の、世界自然遺産白神の豊穡な海と違い、魚も貝の影も見えない。寂しい。素潜りの楽しさも教え、海女ちゃんにしよう！小2の孫娘を白神の海に誘う。盆休みスタートの8月11日（金）朝、帰省客でごったがえす東京駅。キオスクでおやつはグミとワッフル、深川めしとアジの押し寿司の駅弁も買い、10時過ぎ発秋田新幹線こまちに乗る。小2の孫娘メイは発車してほどなく、自分が選んだアジの押し寿司のお昼を食べ、計算ドリルをやり出す。新幹線の中で夏休みの分をやり終える勢いだが、1時間もすると飽きたよう。車内を行ったり来たり、他の客と仲良しになってはしばらく帰って来ない。革爺も顔負けのコミュニケーションの達人。秋田駅前レンタカーを借り、あきた白神駅前の八峰町白神体験センターを目指す。

①絶景に遊ぶ・・今、ここにある「ロタ岬」と「青の洞窟」

体験センターに明るい内に着き、夕映えの海がその先に広がり、稲穂が風に揺れる緑の海岸段丘を車で磯に降りる。小ガニを捕まえてやると、掴み方が判らず指を挟まれ、キャーと悲鳴。小魚の影を追い、巣穴に逃げ込む小ガニに地団駄踏み、初めての磯遊びを楽しむ。体験センターで二つ下の妹の真理子、秋田市内で精神科医をする姪の綾ちゃん、その娘の藍ちゃん、2才と合流。センター隣のハタハタ館で温泉に入り、食事。

翌12日、海辺を灯台のあるチゴキ岬の入江まで走る。少年時代、ここまで徒歩で遠出、流れの速い、先端の深い岩場で大物を狙った。雨で素潜りスクール開催は諦め、岬の断崖絶壁の上に迂回、灯台の周りを巡る。目の前に見渡す限り紺碧の大海原が広がり、左右に湾曲する磯の奇巖怪石に白波が押し寄せ、砕け散る。背後には白神の緑が濃く、淡く迫る。かつて足を運んだヨーロッパの西端、ポルトガルの名勝、ロタ岬以上の迫力。県境を越え青森の十二湖まで絶景をドライブ。イタリア・カプリ島の青の洞門にも引けを取らない美しさの青池。雨のせいか、JRのポスターのインクを垂らした、透き通った美しい青とは行かないが素敵。安政の大地震で大崩れ、川を塞ぎ止め、無数の湖を造った日本キャニオンの展望台まで、山登りも。

県境の秋田県側のお殿水の道の駅で昼食。好きなカレーライスを美味しいと早々と平らげ、爺のホッケ焼魚定食にまで箸を出し、美味しいとホッケ初体験。姪のお殿水定食にはホッケ焼き半身とスルメイカの刺身。ホッケ丸ごとより、甘いイカ刺しも食べたかった。最近スルメイカだけでなく、ホッケも獲れないという。2才の藍ちゃんが飽きて来た妹母娘と別れる。

②猿蹴屋、村は消滅？

雨も上がり、海の家も数えるほどに減り寂しくなった村外れの下浜海水浴場で、二人だけの素潜りスクール。娘は浮輪とライフジャケットを孫娘に持たせるがそれでは潜れない。幸い、それらが不要なくらいの泳力。爺は何度も潜り手本を示すが、アワビどころか、サザエの姿も、アイナメの影すら見えない。爺の眼が衰えたか？魚貝が少なくなったか？ホンダワラやアマモ、ワカメやカジメなどの、海の森をつくり、魚や貝の餌、産卵場、小魚の隠れ家になる背丈のある海藻類が全くない。貝の姿も魚の影も見えない筈。岩館の実家に泊まる。季節の取れ立て野菜の他に、地付きの魚、サザエやアワビ、ミズ（ウワバミ草とも。シャキシヤキ、ネバネバの山菜）、キノコなど山海の美味のオンパレード、爺のアルコールのピッチは上がるが、サザエやアワビは気の毒なくらい小さい。売り物にもならない小さい貝を獲ってくると、「親」が泣くと親に言われ、泣く泣く海に放しに行かされた。

13日は朝、兄夫婦と墓参り。その前に孫娘は屋敷の片隅の畑で兄と一緒にトマトを収穫、大はしゃぎ。昔、子供は家の手伝いをするのが当たり前で、百姓の子は畑や田んぼの仕事、漁師の子は魚釣りや素潜りが上手かった。遊びとしてするのは楽しかったが、強制された「手伝い」は面白くなかった。家の手伝いは働く場と住まいが離れた都会では珍しい。孫娘にとって初体験の「収穫」は、面白かったよう。兄夫婦が「採られる前に採ろう」と不穏な会話。兄がメイを連れ軽トラで出掛け、茄子を沢山持ち帰る。その後、先祖代々の墓参り。墓参りの後、古い我が家、郵便局脇から道路に出てくる一匹の猿。兄が追いかけて、メイも一緒にドーン、ドーンと何発も爆竹を鳴らす。「採られる前に採ろう」と話していたのは猿に採られる前に、人様が収穫しようということだった。白神の山から国道を超え、更に五能線を跨ぎ、こんな人里にまで平気で猿が降りてくる！人間も動物の一つとは言え、野生の動物とどう共生するか？人間にとって、頭の痛い問題だ。

猿騒動の後には釣り。いつも竹竿と糸と浮き、鉛の錘と釣り針のセットを買った近くの、同級生の百合ちゃんち、「さかな屋」は廃屋と化す。人口が減り、空き家が増え、お店も少なくなり、身近な便利さも失われ、危険が増える。革爺の八森中学の同期生は5クラス250人。同規模の峰浜村と合併、八峰町となって統合した八峰中学は1学年20人！半世紀余りの間に子供の数が20分の1以下に激減！いずれ故郷は老人だけになり、次いで人間が消え、町も消滅！東京というブラックホールに吸い込まれる筈の余剰人口も消滅すれば、東京の人口も減る。人口増は論外、どこで、どうやって人口減少に歯止めをかけるのか？

③豊穡の海いずこ？魚も漁師もない海に防波堤だけが残る？

東八森駅の近くに来たホームセンター、ホームマックでようやく釣りセットをゲット。釣りキチの甥のお古の立派な釣竿に糸をつけ、活きいそめを餌に、港で糸を垂れる。孫娘の竿には鯛の幼生2匹とカジカの子がかかるが、爺は丸々太ったセグロ（アカハラ、マルタ）の塩焼をつまみにビールを飲むどころか、活きイソメに指先を噛まれただけ。爺の魚穫ゼロで、孫が3匹というのは孫娘の記憶に長く残りそう。孫娘の釣果の小魚3匹を、兄嫁の次子姉がアルミホイルで酒蒸し、爺も昼の素麺のおかずに一匹お裾分けして頂く。

午後、近くの嫁ぎ先で亡き旦那の墓参りを終えた仙台の長姉姫子、84歳の一団が大挙里帰り。長男の利彦夫婦、2才のひ孫の男の子を連れた孫の慶ファミリー、次男の潤夫婦は大きな愛犬と県境まで3台の車で海に遊ぶ。メイは秋田大医学部を出、大病院で研修中の葵ちゃんの後にくっつき、波にもまれて素潜り研修。風の様に来たお姫さま軍団が風の

様に去った後も爺と一潜り。海から上がっても近くで遊ぶファミリーの所に、爺と葵ちゃん、サザエとムラサキウニ、自分の採ったアメフラシとヒトデをバケツに入れ、「行商」。多分、自慢話。同じ年頃の浮輪の女の子を誘って海に出、覚えてばかりの素潜を披露、最後まで楽しむ。孫娘は娘が持たせた海用軍足（アクアシューズ）で無傷だが、素足の爺の足は傷だらけ。昔も素足で磯を走り回ったのに、厚いままの面の皮と違い、足の皮は薄くなったよう。孫娘には忘れられない思い出が、又一つ増える。

14日は午前中、小さい頃素っぽんぽんで走り降りた地先の浜へ。沖合に大きな防波堤が出来、子供の頃は随分沖に見えた赤岩まで港に取り込まれた。漁獲が減り漁師も減るが、港だけ巨大になって意味があるのか？🐟君の初泳ぎ、初潜りの、ホーム漁場、我が家の下の浜で素潜。タナコバから赤岩、今は港の防波堤の外のテトラポットの下敷きになった白岩の辺りを經由して岸边に戻る、大遠泳！岩と岩の間は遠く、深く、光りが通らず黒ずんだ海の底から、魔物が長い手を伸ばして来て、海底に引き摺り込まれそうな恐怖心で、必死の犬かきで泳ぎ切ったものだが、何を恐れることもなく、爺に付いて来る孫娘。（続く）

の二度目のエジプト紀行（16. 12. 23～30）IV

⑥陽は昇り、陽は沈む

明け方、まだ暗い内から船は走り出す。アフリカの大地を流れ、ヨーロッパとアフリカの間に横たわり、隔てる地中海に注ぐナイル川。5千年以上昔、エジプトに発した文明は地中海を渡り、ギリシャ、ローマを経て北辺に。今、地中海は混乱と飢餓を避け、アフリカから北辺へと逃がれる難民で溢れる。陽は昇り陽は沈む。辺境が繁栄の地に、文明の地が貧困と停滞の地と化す。5千年以上、人類と文明の盛衰を眺め、時を越え豊かな水量で滔々と流れる大河ナイル、その流れに身を任せる。乾いた大地に潤いをもたらすナイル。岸边の、見渡す限り緑の畑に渡る風も清々しい。畑の土も真っ黒、水分を含んで瑞々しく、軟らかそう。沙漠のサラサラした不毛の赤砂とは全く違う。

先ずコム・オンボへ。アスワンから北へ、ナイル川を46キロ下った東岸の小高い丘の上の集落。アラビア語でオリンポスの丘という意味。かつてはオリンポスと呼ばれた。入口が二つに分かれ、通路も二本、二組六神を祀る二つの至聖所がある。太陽と月を両眼に持ち、ハヤブサの頭部と人間の体を持つホルス神と、ワニの頭と人間の体を持つ水神ソベク神のために建てられたからと言われる。珍しい二重構造のコム・オンボ神殿。博物館にはソベク神に因む、黒光りするワニのミイラが沢山展示されるが、ナイル川にワニの姿を見ることは、残念ながらない。続いて80キロ北のエドフへ。両岸にのどかな田園風景が続き、所々、日の丸を書いたポンプ所。JICAの援助でつくられ、ナイル川の水を汲み上げ、灌漑、兩岸のグリーンベルトを拡げ、農業振興に貢献する。1970年代に農業の機械化が進み、過剰な農業労働力が都市に流れ、治安・衛生の悪化、社会政策費の増大を招く。牛や馬、自らの筋力に頼る農夫の姿を垣間見るが、農機を操る姿はない。スエズ運河と観光産業の収入に依存するエジプト経済は、政情に左右されやすい。かつては棉花の世界的生産地で、ナイル川の恵みの肥沃な土壌がもたらす農業が重要な役割を果たすが、アスワンハイダムの建設で、洪水により肥沃な土壌が運ばれなくなり、ダムの建設と灌漑の発達により農地は大きく拡大、農業生産高は大幅に上がるが、肥料の投下量が格段に増えるなど、コスト

が増大、高級綿の代表格とされるエジプト綿は価格競争力で後塵を拝すという。

船内で昼食。地ビールで火照った顔を心地好いナイルの風で冷やす間にエドフに着く。馬車に分乗、ホルス神殿へ。馬車代を払っているが、馭者からしつこくチップを要求される。添乗員から念押しされたように、払わない。ハヤブサの姿をし、王はその化身であるとされるホルス神に捧げた神殿、ホルス神殿は、数あるエジプトの遺跡の中で保存状態が最もよく、浮き彫りのレリーフが綺麗に残る。至聖所の手前にある前室の天井は黒く煤けるが、後のキリスト教徒達が台所として使ったからだ。そのキリスト教徒、コプト教徒も今は少なく、イスラム教徒が大部分を占める。

船に戻り、かつて「テーベ」と呼ばれ、中王国時代から新王国時代に首都として栄えた、ルクソールに向かう。船内で、碑銘に使われた象形文字、ロゼッタストーンの発見とシャンポリオンの解読で有名になった、古代エジプト文字「ヒエログリフ」教室。ナイルを赤く染めて沈む沙漠の夕焼けがいい。船が走るにつれ、沈む太陽を黒く型どる前景も次々変わり、あわせて、真っ赤な太陽も形を変える不思議な夕焼け。船の走りに合わせ太陽も走る。中々沈まない。船内での夕食後、ダブダブのワンピースの民俗衣装、ガラベイヤを着て踊る「ガラベイヤパーティ」で夜も更ける。

⑦玉子かけごはん

夜明け前に目を覚まし、ナイルに昇る朝陽を拝む。かつてシナイ山に昇る初日の出を拝もうと、夜っぴて登山した時ほどではないが、モロッコの沙漠の稜線に登り、初日の出を拝んだ時くらいの冷え込み。半袖シャツの上に、小さく丸めてスーツケースに押し込めてきた、UNIQLOの赤いウルトラライトダウンを羽織る。昇る朝陽を背にカラフルな熱気球がいくつも空を漂う。上空から眼下に広がる西岸の遺跡をパノラマの様に見下ろす。一人4百ドルほどと高いが、人気。そろそろ異国の食事も飽きてきた頃だと、添乗員の吉田さんが持ち込んだ日本の食材で特別につくって貰った朝食が出される。焼魚や煮物、お新香に味噌汁、卵焼き、ついでに玉子かけごはんも食べてしまう。吉田さんに感謝！

歴代のファラオが埋葬された王家の谷や壮大な神殿が、当時の繁栄をうかがわせる。カイロと並ぶ国際観光地、ルクソール上陸、「ネクロポリス（死者の町）」と呼ばれ、中王国時代以降、歴代ファラオが盗掘を防ぐために安眠の地を築いた筈の奥深い谷、ナイル西岸の王家の谷へ。土埃を上げ岩山の間を走る。遺跡保護のため電動トロッコ（トラム）に乗り換える。墓荒しの盗掘を逃れるため、岩山のどん詰まりの谷の斜面を掘り下げ、綺麗に装飾を施した長いトンネルの先に、死後の安眠のための空間。きらびやかな己が死後の住まいと、ミイラと化した己れを見んと、豊かになった遥かな辺境から、大挙して観光客が押し寄せ、厳しい暮らしを続ける、己が末裔の糧を提供することになるとは！埋葬される第18王朝トトメス1世に始まる、新王国時代の歴代ファラオは夢にも思わなかつただろう。壁だけでなく天井まできらびやかに彩飾された、奥の広間の大きな石棺の中で、干からびたミイラとなってファラオ達は眠る。現代のファラオ、大金持達が周りから隔離されて固まって住む、厳重に警備されたゲートタウンの様なものか？ツタンカーメンはじめ、ラムセス6世、セティ1世、トトメス3世など、60基ほどの墓が発見されている。

元来た道を下る。河岸段丘の高い岩壁の麓に、傾斜を利用して建てられた3層の葬祭殿、ハトシェプスト女王葬祭殿へ。20年前反政府勢力による銃の乱射事件があり、日本人を害

む多くの観光客が殺された。横に大きく広がり、中央の参道から、直接2階の神殿へとつながる出雲大社の大社構造のような造りが遠目に美しい。古代エジプト建築の傑作の一。壁面には交易の様子や神々の姿などが今に美しい。ハトシェプストはエジプト初の女王。テーベ（ルクソール）の守護神アメン神や父親のトトメス1世と自らのために建てた。広い駐車場の一角、簡単な造りのカフェと土産物屋。20年前の痕跡はきれいに覆い隠され、20年の間に何か変わったのか？変わらないとすれば、今日、今、この場で再び銃撃事件があってもおかしくないが、国際色豊かな客で賑わう。旅行の楽しみの一つ、ご当地マグネットを探すがない。ナイル川の近く、西岸遺跡の入口、緑の畑の中に突然高さ21mの2体の大きな石像。新王国時代絶頂期のアメンホテプ3世の象。プトレマイオス朝に、ギリシャ神殿のメムノンのもとされ、メムノンの巨像と呼ばれるようになった。

船に戻り昼食後、陽が昇り、「生者の町」と言われるルクソール東岸観光へ。町の機能はこちら側に集まる。先ずカルナック神殿へ。その中でもアメン信仰の発祥の地として中王国時代に建てられ、歴代のファラオが増築を重ねたアメン大神殿の敷地は30ヘクタールほども。ルクソール（テーベ）の守護神アメンだが、首都となってからは太陽神アメン・ラーとなり、国家の最高神となった故か？第2塔門と第3塔門の間にある大列柱室には134本の石柱が立ち並び、圧巻だ。部屋の周りの浮き彫りのレリーフも素晴らしい。カルナック神殿とスフィンクスが両脇に並ぶ3キロにも及ぶ参道で結ばれていたルクソール神殿へ。アメン大神殿の附属神殿として建てられ、第1塔門には2本のオベリスクが立っていたが、右側の1本は今、パリのコンコルド広場に立つ。古代エジプトで神殿の塔門や陵墓の前に対に立てられた記念柱のオベリスク。アスワンで採れた花崗岩で造られ、先端はピラミッド状で、カルナックのアメン神殿の前にいくつも立てられていたが現在は1柱を遺すのみ。多くはローマ時代にローマに運ばれ、広場の中心などに立てられ、今日のローマの景観に欠かせないものになっている。近代になってパリやロンドン、ニューヨークにも移建された。「権力」の在処の移動に連れ、運ばれた。古と変わらず神殿に沈む夕陽を鑑賞。船内で夕食。ベリーダンスを楽しむ。船上で最後の白川夜船。

⑧世界でもっとも退屈な町

ルクソールの船上で朝食後、下船。ルクソール空港へ30キロをひとつ走り、カタール航空機で空路ドーハへ。2時過ぎに着いて翌朝3時過ぎのフライトまで時間。空港を出て市内観光。地下の石油が地上のコンクリートと鉄の巨大な塊に化けた砂上の楼阁。カタールの人口2百万人の8割以上が首都ドーハに住む。往路機上から見下ろした摩天楼林立するドーハ市内をバスと徒歩で2時間ほど見て回る。木曜日の夕方だったが、港には豪華なヨットがびっしりと係留され、奇抜なデザインの高層ビルや高級ホテルが林立、ショッピングモールには高級ブランドが軒を列ねる。高層マンションが建ち並び、緑の芝生が見事な低層の広い邸宅も軒を列ねる高級住宅街も。並べてきれいだが人影は少ない。屋外で働くのはインドやパキスタン、イランやネパール、フィリピンなどからの出稼ぎ。人の匂い、人間の生活が見えない。酒も飲めない。世界でもっとも退屈な町と言われるのも最もだ。

最後にスーク・ワキーフへ。殺風景な街の中に突然、アラブの町ならどこにでもある、あの雑然としたマーケットが現れる。ベドウインの人々が週末に物を売っていたウィークエンドマーケットが始まりという。迷路の両側に金銀細工、香水、伝統衣装、みずタバコ、

スパイス、食料や日用品、ありとあらゆる物が売られ、カフェやレストランも。亀や孔雀、スカラベ（糞ころがし）の派手なマグネットと何故かセイロン紅茶をドーハでお土産に買う。ルクソールで買った単色のスカラベのマグネットと違ってドーハのきらびやかなマグネットはゴルフの時にボールの替わりの目印に置くマーカーに使っているが、エジプトとカタールの国情の差の様にも見える。（了）

◎日本の火山研究について・東大三鷹クラブ第134回定例懇談会のご案内

三鷹クラブ第134回定例会は、講師に大久保修平さん（東大地震研究所 教授、昭和47年入寮）をお招きしました。テーマは「日本の火山研究について」です。

大久保さんは、昭和57年、助手として地震研究所入りして以来、今日まで、一貫して同所をベースに研究活動を続けておられます。平成17年4月から4年間は、同所の所長を務められました。三鷹クラブでは、大久保さんが所長に就任された直後、平成17年7月の第61回定例会において、とくにお願いして、大方の関心の強い、地震を話題にいただきました。今回は、御専門の火山に焦点をあててのお話です。

富士山をはじめ、日本各地の名山の多くは、火山で占められています。火山は、観光資源としてばかりでなく、私達に大きな恵みをもたらします。その一方、予期せぬ大噴火によって、人命を損い、経済的、社会的な打撃を与えることも少なくありません。日本列島には、現在も噴煙を上げ、活発に活動している山もいくつかあります。私は、30才代のはじめ、熊本県庁に4年間勤務しました。しばしば訪れた阿蘇山では、初めて火口を覗き見て、火山活動の姿を目のあたりにし、自然の強烈なエネルギーの一端を体感しました。時に、噴煙の勢いが強まり、火口への立入りを制限されることもありました。阿蘇山では、常時、観測、監視が行われ、数値などの僅かな変動を感知分析し、適切な危害防止の措置がとられたものと理解しております。

大久保さんの専門領域も、まさに、そうした地道な観測の積み重ねと、その結果を正しく解析する手法を中心に、研究活動を展開して来られました。現に三宅島では微細な重力の変化を正確に読み取り、大噴火を事前に予知してその効果を実証されました。大久保さんの観測、研究の対象は、国内のみならず、アジア各国にも及んでおり、国内の諸学会に加えて、国際的な学会からも賞を授与されています。豊富な実績、経験に裏打ちされたお話をお聞きし、さらに、関心を持った皆様からの鋭い質疑により、有意義な会合となることを期待しています。（平賀 記）

日 時：平成29年9月28日（木） 18時30分～21時[通常の夕食時開催]

場 所：学士会館本館302号室（千代田区神田錦町3-28 TEL 03-3292-5931）

会 費：6000円（会場費、夕食代・飲み物代、通信費など込み）

二次会：別途すずらん通の中国料理店 SANKOUEN にて開催予定

申込先：(有) ティエフネットワーク Email：tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp

◎アルゼンチン→MIT→日本でインターン、WHY?

8月末の金曜夕方、本郷の中華料理屋で、竹内碧君(16年入寮、理Ⅱ、薬)の友人で、アルゼンチンからMIT 留学、東京のNECでインターン中のイグナシオン君を囲む交流会。竹内君は昨年、三鷹クラブの皆さんのカンパも得て、アメリカ MIT での「生物学ロボコン」

世界大会に出場、イグナシオン君と知り合う。日本に興味を持ったイグナシオン君、1年間勉強した日本語を器用に操り、夏休みを利用して来日、NECでインターン。MITを縁にアルゼンチンと日本がつながり、院生・留学生も含めOBと現役の寮生、男女、賑やかに交歓。終了後、事務所で乾き物とビール、お酒で遅くまで二次会。経験と知識を交流、ネットワークを広げ、社会のために役立ってくれると嬉しい。

参加者は、イグナシオ・ペレス・ベドシャ（アルゼンチン、MIT）、北條 新之介（2015（院）・総合文化研究科地域文化研究専攻アジア科中国・栃木・真岡→東北大）、青山 絵里香（2016・文Ⅲ・愛知・一宮）、小林 義信（2016・理Ⅱ・水戸第一）、竹内 碧（2016・理Ⅱ（薬学部）・高知学芸）、八野 圭晃（2016・理Ⅱ・兵庫・灘）、與古田 紗椰（2016・文Ⅰ・沖縄・球陽）、柏田 祐樹（2017（院）・理学系研究科天文学専攻・埼玉・栄東→早大）、韓 旭（2017・医学部研究生、医療情報学・中国（南通）・前橋工科大）、高橋 俊広（2017・文Ⅱ・甲府南）、野村 大善（2017・理Ⅰ・北海道・北嶺）、橋本 信歩（2017・理Ⅰ・大阪・清風南海）、花畑 三華（2017・文Ⅲ・石川・小松）、藤川 剛司（2017・理Ⅰ・浜松西）、吉田 樹生（2017・文Ⅱ・旭川東）、OBが國枝 明弘【春風亭昇吉】（2003・文Ⅱ 経済・岡山・城東）、田中 克幸（2003・理Ⅱ 農学部応用生命科学科・福岡・東筑）、打林 國雄（1965・理Ⅰ工学部都市工学科・富山中部）、辰 紘（1965・文Ⅰ教養学部教養学科国際関係論・大阪・三国丘）、干場 革治（1966・文Ⅰ・能代）、小佐古 敏荘（1968・理Ⅰ・広島・修道）。

◎応援部の諸君とも「味は文化です」！

名横綱大鵬の連勝を阻止した幕内力士浅瀬川が始めた店で、三鷹寮や東京银杏会のイベントで演武して貰う、応援部の諸君にも本格的ちゃんこ鍋を味わって頂く。「応援団」も日本文化だが、社会に出てから国際的に交流、活躍するには自国の食文化も知る必要。自国の文化を知らないと他国の人間に尊敬されない。将来、海外からの大切な客人を、赤門向かい、母校の近くのお店で、ちゃんこ鍋と日本酒で歓待すると喜ばれること確実。

参加者は、応援部が神田 朋希（2015・理Ⅰ・富山中部）、三竹 亮（2016・文Ⅰ・東京・西）、宮下 達郎（2016・文Ⅰ・長野・屋代）、阪倉 龍一郎（2017・文Ⅱ・大阪星光学院）、菅沼 修祐（2017・文Ⅱ・私立武蔵）、富山 裕太（2017・文Ⅲ・千葉・開成（東京））、林 篤志（2017・理Ⅰ・智辯学園和歌山）、応援部を取材していた渡部 史哉（武蔵大学・2015・社会学部メディア社会学科・愛媛大附属）、寮生が檜枝 悠太（2016・理Ⅰ・兵庫・東大寺学園（奈良））、韓 旭（2017・医学部研究生、医療情報学・中国（南通）・前橋工科大）、北浜 駿太（2017・理Ⅰ・岡山・倉敷天城）、OBが國枝 明弘【春風亭昇吉】（2003・文Ⅱ 経済・岡山・城東）、打林 國雄（1965・理Ⅰ 工学部都市工学科・富山中部）、大矢 昇治（1965・文Ⅲ教育学部教育学科・神奈川・湘南）、小林 政秀（1966・文Ⅰ 法学部・岡山朝日）、干場 革治（1966・文Ⅰ・秋田・能代）、竹島 信夫（1970（駒場寮）・文Ⅰ 法学部・灘）。

◎終わりに（再見）

旧制高校の寮以来続く「自治の学校」としての国立大学の「自治寮」が廃止され、最近では未成年だから寮では酒を飲むなども。厳格なイスラムの国ではないので、いずれ酒席の機会。その時上手に飲めるように、打解けて付き合い、生涯の友が一人でも多く出来るように、OBの皆さんのお手伝いも得、交流の場を設けて欲しい。一波が万波を呼ぶと嬉しい。